

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320141

研究課題名 (和文) 家族写真の歴史民俗学的研究

研究課題名 (英文) The Historical and Folkloric Study of Family Photographs

研究代表者

川村 邦光 (KAWAMURA KUNIMITSU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30214696

研究成果の概要：日本の家族写真は、当初西洋の影響を受けていたが、独自の展開をしてきたことを明らかにした。家族写真が人生儀礼や年中行事において撮影され続け、民俗的慣行として確立され、民俗資料として有効であることも明らかにした。現在では、特に年賀状に家族写真が載せられて、友人・知人に向けて発信され、家族の共同性を確認する機能を果たしている。本研究は家族写真に関する初めてのまとまった本格的な研究であると考えられる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2007 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2008 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総計	10,900,000	3,270,000	14,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：民俗学 家族写真 家庭アルバム 近代家族 家父長制 年中行事

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の川村は、著書『<民俗の知>の系譜』(昭和堂、2000年)において、数多くの写真や絵画、絵葉書、新聞広告などの図版を載せて、文化の変化を理解するための視覚資料として用いた。

また、科研「戦死者をめぐる宗教・文化の研究」(平成 12-14 年度)、同「近代日本におけるナショナリズム・国家をめぐる総合的研究」(平成 15-17 年度)においても、戦争関連の写真、特に将兵と家族の写真や出征記念写真、戦死者の葬式などの家族員の写っている写真を資料として用いて、民間での戦争への対応に関して研究した。

さらに『京都新聞』(2001年4月から2008年9月)で、「写真から読むにつぼんの光景」と題した記事を毎月一回連載し、そこでは家庭アルバムの写真などを載せて、戦前・戦中・戦後の世相の変化について記してきた。これらから、写真を貴重な民俗資料また歴史的な資料として位置づけて、これまで民俗学でほとんど研究対象とはされなかった家族写真を研究する契機となった。

## 2. 研究の目的

(1) 民俗学の資料として、家族写真を位置づけて、時系列に沿って並べてみることによって、いつどのどのような機会に撮影が行われ、

写真の構図やポーズ、また服装や髪型などの風俗の変化を明らかにする。

写真撮影では、被写体のポーズの変化がきわめて興味深い研究テーマとなる。戦前においては、写真は写真館で行われ、かなりぎこちない緊張したポーズで撮られていたが、1950年代あたりから、家庭にカメラが普及することによってリラックスした、いわば自然なポーズになっていったように、身体技法の変化ばかりではなく、心性の変化も起こっている。このような身体と心性の変化を探究することが目的となる。

また、家族写真には、撮影された当時の時代が写されており、歴史的な資料でもあり、家族のミクロな歴史を国家的なマクロな歴史と関連させて、相互の影響関係を探究する。(2)家族写真に写されている民俗的事象を読み取っていく作業を通じて、家・家庭の民俗的な慣行を明らかにする。家族写真の撮影は人生儀礼や年中行事において行われているように、そこから家族にとって何が重要な民俗的儀礼だったのか、またそれがどのように変化していったのかを明らかにして、家族にとって家族写真がどのような意味をもつのかを考察することが大きな研究課題となる。

### 3. 研究の方法

(1)各家に所蔵されている家庭アルバムに収められている家族写真を調査するとともに、本研究の基本資料となる家族写真の収集を行う。

(2)戦前、戦中、戦後を一応の時代区分とし、家庭内で写真撮影をする機会と考えられる、誕生・お宮参り、七五三、学校入学・卒業、就職、成人式、徴兵検査、結婚、還暦祝い、葬式などの一生のサイクルにおける人生儀礼、正月、桃の節句、端午の節句、祭礼、お盆などの一年のサイクルにおける年中行事、特に出征、復員、戦死といった戦争に関して、家族写真を資料として、調査を行う。

(3)以上の調査に基づいて、家族の構成がどのように変化・展開していったのかについて、民俗儀礼や年中行事と関連させ、東アジアや欧米の家族写真との比較を射程に入れて、文献・資料の収集および研究を3年間にわたって行う。

### 4. 研究成果

(1)本研究は、日本における初めての家族写真に関するまとまった本格的な研究であると考えられる。

鶴見良行が1964年に「家族アルバムの原型」(『思想の科学』34号)を発表して以来、家族写真の研究はわずかしかなかった。坪井洋文の「故郷の精神史」(『日本民俗文化大系10 家と女性』小学館、1985年)、阿南透の「写真のフォークロア」(『日本民俗学』175

号、1988年)、有馬学の「家族の数だけ歴史がある：家族アルバムをどう読むか」(日向市史編さん室編『日向写真帖』日向市、2002年)で、家族写真について言及されているが、問題提起的なものに止まり、歴史的な研究としては不十分であり、民俗学的・文化史的な視点もあまりなかった。

また、北原恵の「正月新聞に見る<天皇ご一家>像の形成と表象」(『現代思想』29巻6号)では、天皇の家族写真に関しては歴史的・文化史的な研究が行われているが、多様性に富んだ民間の家族写真に関しては論じられていない。

家族写真の歴史的な研究としては、東京都写真美術館の『ファミリー・アルバム：変容する家族の記録』(東京都写真美術館、1992年)をあげることができるが、ここでは西洋と日本の著名な写真家の写真を主に扱って、美術史的・写真史的な研究となっている。

本研究の特徴は、19世紀中頃から現在に至る、家族写真に関する文化史的な研究であることである。

(2)日本の家族写真は西洋の家族写真の影響を受けてきたことは確かだが、日本独自の展開もあったことを明らかにした。

西洋の家族写真では、家長である夫(父親)を中心とし、両脇に妻(母親)と子供が並んでいるものが多いとされている。この構図は「エディプスの三角形」と呼ばれている。そこには、夫が妻と子供を庇護するという、近代家族のイデオロギーが指摘されている。

日本でも、この構図のものは少なくない。だが、それとは異なった構図のものもある。夫の母親が真ん中に坐って中心となり、両脇に夫妻や子供が立っているという構図である。それは西洋のものとは対照的に、逆三角形の構図になっているのである。

そこには、近代家族の家父長制のイデオロギーが投影されているのではない。父母に孝養を尽くすという、儒教的な倫理を表象しているといえる。このような構図の家族写真は幕末期の上野彦馬ばかりでなく、現代までも及んでいるところからすると、日本的、または東アジア的な特色ともいえそうであり、今後の課題ともなる。

(3)日本では、家族写真の撮影が誕生祝い・お宮参り、七五三、学校入学・卒業、就職、成人式、徴兵検査、結婚、還暦祝い、葬式などの人生儀礼、また正月、お盆、桃の節句、端午の節句などの年中行事において行われている。それは民俗的慣行として展開されていき、今日に至るまで継続している。成長の記録として、家族写真は意義をもっていたことがわかる。

しかし、1950年代あたりから、一般家庭にカメラが普及することによって、このような家族写真の撮影は変化していくことになる。

撮影者が写真館の写真師から、家族メンバー、主に父親へと変化していく。人生・年中の区切り目において写真撮影が行われるのは変わらないが、家族の日常的な光景が撮られるようになるのである。被写体の服装は正装から普段着へ、ポーズはぎこちない形式ばったものから、笑顔を見せたいわば自然なリラックスしたものへと変化していった。

(4) 現在、家族写真が撮影されているのは、年賀状に載せるためである。それは 1980 年代あたりから始まった。初めは写真館に頼まなければならなかったが、現在では家庭で自分で制作できるようになっている。家族写真は年賀状において、その存続と意義の基盤を見出していることが明らかになった。家族写真年賀状は家庭内で意義をもつのみならず、親戚や友人・知人に発信されて、家族の共同性を自他ともに確認する機能を果たしている。さらには、その作成が数年を経ることによって、家族メンバーの成長や変化を可視化し思い返させ、情緒的な結びつきを確認させるような、記憶の共同体を構築する媒体ともなっている。このようなところに、家族写真年賀状が盛んになっている根拠を明らかにすることができた。

(5) 家族写真の現状に関しては、かなり興味深い面が明らかになった。第 1 に、年賀状の家族写真である。先に述べたように、これは今後とも大いに盛んになっていくことが予想できる。というのも、マスメディアにおいて「家族の危機」によって「家族の絆」が弱まったと叫ばれ、家族写真年賀状を通じて、「家族の絆」を確認・補強、もしくは強化しようとする傾向が見られると考えられるからである。

第 2 に、個人の日記またライフヒストリーを綴ったブログに載せた家族写真が現れている。それは、現在、80 歳代の戦争体験者に多い。自分史として書物で刊行されてきたが、より大衆的なメディアとして、ブログが盛んになるにともない、自分史をブログで発表する傾向が高まってきたようである。自分の戦争体験を後世にたんに残しておくだけではなく、戦死者たちまた戦後に死去した戦友たちの追悼・弔いを意図するとともに、他者に対して戦争体験を知らせて共有しようとする意思があると考えられる。そこには、戦争という過去の歴史を想起させ、未来へと向けて戦争の歴史を想起させ続ける、記憶の共同体を構築しなければならないとする切迫した思いがある。

(6) 家族写真の研究はこれまで主に美術史の分野で取り上げられてきたが、文化史や社会史、さらに民俗学の領域として設定して研究したものはこれまでなかった。したがって、本研究の成果は民俗学ばかりでなく、文化史や社会史の学会、また海外の日本研究にも大

いに寄与するものであると考える。

本研究では、日本国内の家族写真を研究対象としたが、なかには戦前に台湾で撮られたものもあった。戦前においては、台湾や朝鮮、中国閩東州、南洋群島といった、旧日本植民地や租借地、委任統治地で撮られた家族写真もあり、それは植民地などでの家族生活を知るうえで貴重な資料となる。また、これらの旧植民地など、かつての言葉を用いれば「外地」では、現地の人々も家族写真を撮っていた。「外地」では、初めは「内地」出身の日本人写真師が写真館を運営していたが、やがて写真技術が「外地」に普及し、現地の人々が写真館を運営するに至っている。以上のように、「外地」での家族写真の研究、また「内地」と「外地」の家族写真との比較研究が今後の重要な課題となると考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

- ① 荻野美徳、「一九二〇年の「男性美」、荻野美徳編『性の分割線』、青弓社、121-149、2009 年、査読無
- ② 川村邦光、「家族写真の系譜をめぐる」、『近代日本における表象と語り』、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、1-62、2008 年、査読無
- ③ 才津祐美子、「白川村発見-「大家族制」論の系譜とその波紋」、小松和彦・還暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学/異文化の民俗学』、法蔵館、430-41、2008 年、査読無
- ④ 杉原達、「中国人強制連行」、金富子・中野敏男編『歴史と責任』、青弓社、253-255、2008 年、査読無
- ⑤ 富山一郎、「『「原爆の絵」と出会う』からの始まり」、『日本学報』、27 号、1-18、2008 年、査読有
- ⑥ 真鍋昌賢、「人はいかにして〈客〉になるか」、小松和彦・還暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学/異文化の民俗学』、法蔵館、450-468、2008 年、査読無
- ⑦ 川村邦光、「家族写真をめぐる覚え書」、『待兼山論叢』、40 号、2007 年、1-11、査読無
- ⑧ 川村邦光、「子供の死をめぐる語りと遺影」、『日本学報』、26 号、1-35、2007 年、査読無
- ⑨ 川村邦光、「断髪と頭脳」、鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』、慶應義塾大学東アジア研究所、237-281、2007 年、査読無
- ⑩ 真鍋昌賢、「研究対象としての「二次的な声」」、『口承文芸研究』、30 号、214-220、2007 年、査読有

- ⑪ 川村邦光、「聖戦の凶像とその後」、『岩波講座アジア太平洋戦争』、6巻、岩波書店、353-380、2006年、査読無
- ⑫ 荻野美穂、「人口政策と家族」、倉沢愛子・杉原達他編『岩波講座アジア・太平洋戦争』、3巻、岩波書店、151-178、2006年、査読無
- ⑬ 荻野美穂、「産む身体/産まない身体」、荻野美穂編『身体をめぐるレッスン』、2巻、岩波書店、3-26、2006年、査読無
- ⑭ 才津祐美子、「「民俗」の「文化遺産」化をめぐる理念と実践のゆくえ」、『日本民俗学』、247号、169-194、2006年、査読有
- ⑮ 富山一郎、「言葉の在処と記憶における病の問題」、富山一郎編『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、201-224、2006年、査読無

〔学会発表〕(計3件)

- ① 川村邦光、「家族写真の現在をめぐる」、日本民俗学会、2008年10月5日、熊本大学
- ② 川村邦光、「家族写真の歴史民俗学的研究へ向けて」、日本民俗学会、2007年10月7日、大谷大学
- ③ 川村邦光、「家族写真の系譜をめぐる」、国際日本学研究会、2007年4月7日、大阪大学

〔図書〕(計2件)

- ① 荻野美穂、『「家族計画」への道』、岩波書店、351、2008年
- ② 川村邦光、『聖戦のイコノグラフィ』、青弓社、250、2007年

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川村 邦光 (KAWAMURA KUNIMITSU)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30214696

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

荻野 美穂 (OGINO MIHO)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：60194479  
落合 恵美子 (OCHIAI EMIKO)  
京都大学・文学研究科・教授  
研究者番号：90194571  
才津 祐美子 (SAITSU YUMIKO)  
長崎大学・環境科学部・准教授  
研究者番号：40412613

重信 幸彦 (SIGENOBU YUKIHIKO)  
北九州大学・基盤教育センター・教授  
研究者番号：70254612  
杉原 達 (SUGIHARA TOORU)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：40113138

富山 一郎 (TOMIYAMA ICHIROU)  
大阪大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：50192662  
真鍋 昌賢 (MANABE MASAYOSI)  
大阪大学・文学研究科・助教  
研究者番号：50346152